

# 共 産 主 義

烽火改題

№ 12

関西共産主義者同盟政治理論誌

1962. 9. 15

## ■ 主 張

1962年度下半期の斗争に向けて ..... 書記局(1)

■ 全電通の右傾化と左翼反対派の任務 ..... 大崎 悟(5)

総評大会とわれわれの任務 ..... 木山 茂(8)  
——'62総評運動方針批判——

アルジェリア問題について ..... 浦野正彦(13)

■ 平和運動への接近 ..... 竹野 厳(17)

■ 社会主義学生同盟を再建し  
反帝斗争としての学生運動を展開せよ ..... 学対部(21)  
——再建大会議案書要旨——

## ■ ニ ュ ー ス

電通大阪労研の斗い ..... (24)

■ 編 集 後 記 ..... (25)

発行：労働者協会 ￥50

主張

関西共産主義者同盟書記局

一九六二年度下期の斗争に向けて

秋の政治斗争の中心となるであろう大学管理制度改革をめぐる、今我々の周囲にはすでに官憲の弾圧が展開されている。そして、情勢の基調をしっかりと把握し展望をもつた政治斗争を追求しなければならぬ。現在、日本の労働者階級はまたもや安保以前の日本の労働組合主義の右翼的展開に、その中心的な勢力をかたむけている。こうした条件のなかにあつて、ブンド崩壊以降関西ブンドへ結集し、そして全国社学同の再建へととりくみつつ、我々は一体何を中心的な課題とし、どのような点において過去の教訓を学んだら良いのか。また来るべき大斗争に備なえて我々は自己の体制を真剣に検討せねばならない。

さて、我々が自己を検討するにあつての客観的要因は、と云えば、それは一九一七年以降の危機の中から生じて来た帝國主

義の特殊の段階とも云うべき國家独占資本主義そのものである。それは大内力氏が最近「経済評論」に発表したことく、労働力商品化への國家権力の介入 すなわち完全雇用の経済政策やその条件となる管理通貨制度と財政々策などによつて特徴づけられていく。我々は、現代社会を資本主義社会として理解し、その社会における自己疎外の現実をみつめ、根底から社会制度の变革をなすことを目標にしている。その場合、当然中心になるのが变革対象の把握そのものであり、更に云うならば、変化し、人間の变革に対する意識にも能動的な影響を与えているところの变化しつつある対象の把握である。

國家独占資本主義として表現される現代資本主義が、变革の主体現たプロレタリアートの意識に与える影響は二つの側面から

なされている。それは、まさにベルンシュタインの時代と同様に、まずオ一には資本主義の安定的発展をめぐつてなされる安定ムードとも云える側面であり、オ二にはその安定的発展を通じて蓄積される危機の側面である。

まず、安定的側面についてみてみよう。

資本主義が、短期的にはあれ比較的安定した時期には、プロレタリアートの運動の世界的発展に機々の影響を与えている。端的に云うならば、それは資本主義の延命についての信頼であり、その中で社会政策的な生活の改良への期待であり、またその面での若干の改良の獲得でもある。改良主義的政見と労働組合は、これを思想的な体系にまでもつめあげ、労働者階級の思想的な武装解除を準備する。そして、現代資本主義は、一九二九年に始まり一九四九年の中國革命にまで続く危機の時代を脱却するや、簡単に云つてこの安定局面にはいつたものと認められる。いわゆる大恐慌期及び大戦中の操り延べ需要、朝鮮戦争、技術革新、鉄鋼ストなどと続いたアメリカ経済の一定の成長要因の継続的存在、そして復興へ、という膨脹過程をたどつていた日本、

西独資本主義、それに危機の中から展開されたEBCの発展、これらのすべてを与えたアメリカ資本主義の世界的な支配力、ドルによる世界市場の統一etc、etc

このような条件が戦後の資本主義において、中間恐慌(主として在庫調整による)を生起せしめたが、全般的過剰生産恐慌はなくなつたかどうかの論戦をマルクス主義経済理論家のあいだですら統一的に流行させたことの要因でもある。

我々は、現在の局面をこの安定発展の側面からとらえるならば、現在がまさにその最終的局面にあるのではないかということ、情勢分析の中で重ねて深めて来た。それは、これらの安定を与えた現代資本主義の持続的とも云える需要要因が失なわれていきつつあること、及びドル支配がドル危機としてあらわれるに至つて居ること、更には、安定発展の全面的政策とも云うべき池田内閣の所得増進政策の最近のすう勢をみて云えること、などから追求された。更にアメリカのケネディによる国民所得、設備投資長期にわたる高度成長政策の継続もつけ加えられなければならない。そして

逆に需久消費財中心の消費ブームで景氣を持續させて居ること、日本が設備投資の過剩から輸出に中心の期待をかけたこと、と、世界資本主義の集約点が内的には過剰投資、外的には市場問題となりつつあること、である。それは個々の国々の内部では例えば日本の三井三池の如き企業整備として展開される産業部門や、アメリカの如く失業率の増大、西独の如くついに労働組合と資本。政府の対立が表面化しつつある、等々の事実として、資本と労働の対立というかたちであらわれている。国内競争、過剰投資は更に企業利潤を低下させ、株式市場の相場下落、資金不足(日本、西独)などを生起せしめ、国際通貨のドル危機と共に国際的な資本創生の問題をも切迫させて居る。

さて我々は危機における資本の政策が結局は労働者階級にその負担を全面的に転嫁すること、最も露骨に除外を現実化するのと、それが国家権力そのものにより遂行されることを知つて居る。だから問題は、このような危機に対する資本家階級の準備は、安定局面の中でも巨大な資金と別動隊

この安定末期を加速度的に速めるものこそEBCの発展及び世界的な自由化の体制であり、それを通じての国際的超独占企業間の商品価格の競争である。輸出問題を軸としながら、現在設備投資の過剰金全世界に成熟しつつあること、そこに安定局面が不安定局面に転化する鍵がある。

さてそこで強調しておかなくてはならないのは、現在体制の安定性は客観的にのみよるのではない。例えば、例え安定的な経済局面にあつても相対的な不安定な情勢が展開され、体制そのものの危機にまで進展する例として、レーニンはドレフユース事件を挙げているし、そこまで行かないとしても安保斗争もまた大きな可能性をはらんでいた。その逆に、安定末期にもかかわらずこの局面を引き延ばすことは、労働者階級の階級的意識の未熟、戦斗性の喪失によつても可能である。すなわち、すべてを改良的に、大きな目的までも改良的に考へ行助する習性である。それは目下、斗争の中で強力な組織として成長して行くよりも、組織の近代化(合理化)自体を目標とする民間の組合主義において展開されている指導性、あるいは政策転換の積み重ねのため

とが結合して準備されること(例えば、ワイマール体制の下でのナチズムの発展。日本の現状では一貫した戦後の反動化政策と現在のその担い手、岸、佐藤派の待機)、それに対する既成左翼の歴史はまるでプロポットの如くこの局面の転換の過程で左右にゆれうごいたことを、現在の局面でどんな教訓とするか、ここに存するのである。それは、換言すれば「安定末期を如何に闘うか」ということでもある。

安定末期における労働者階級の代表的な思想が、少なくとも現局面にあつては右翼的であること、それが一方では資本主義の安定性への大衆的な迎合(安定ムード)であると同時に、他方では指導部の意識的な妥協(安保・三池を通じての敗北の右翼的総括)でもあることはすでに述べた通りである。それは現在展開されている賃上げ斗争。或いは経済的政治的な政策転換斗争を戦術的な日常的な斗争としてよりも、何かそれ以上の、それを積み重ねるならば窮極の目標に到達できるかのようなものとして捉え、社会党の体質改善、或いは政治的には三分の一のカベを破ることを提起し、結局その条件の是非々々論戦の中で端緒とも云

に、危機の側面を見失つた社会党の構想路線などについて云えることである。

では、危機の側面とは如何なるものか? それは、安定的発展を通じて蓄積される発展要因の喪失(資本主義の経済循環)に集中的に表現されるであろう。構造改革を現代資本主義の論争を通じて「恐慌待望論」の是非というテーマが論ぜられたが、若し資本主義の循環そのもの(恐慌)を否定するとすれば、それは永久安定論者として変質したことを意味する。

安定局面における斗争の戦術を資本主義の体質変ほうにまで進めるところに改良主義の一般的な陥し穴がある。だが、危機はまさに資本主義と恐慌、及びその危機の構造的な側面ともいふべき資本主義と市場の問題を根底に持ちつつ、そしてその政治的な焦点として世界戦争の危機を形成していること、これは云うまでもないことである。このような危機の蓄積が安定末期の中で如何に準備されているかは、「関西ブンド組織局通達などですでに明らかにした。簡章に要約すれば、アメリカ資本主義が需久消費財中心の成長を輸出振興のタイプに切り換える方向に進みつつあり、EBC諸国が

うべき改良斗争、抵抗斗争そのものが展開されないという力学的構造を持つている。少なくとも我々の現在までに至る問題意識と実践的な展開は、かかる組織的な問題を大衆斗争と切りはなされた次元で自立化させることはなかつた。むしろ端緒としての様々な諸斗争が、それ自体効果あるものとして展開され前進する諸条件を主体と客体(客観的情勢)の相互関係の中に見出し、その中で最大の機能を發揮する政治組織として自己を位置づけてきた。事実、この蓄積されつつある危機の政治情勢の舞台における特徴は、

(イ) 自民党自体が派閥政党であるため、戦前の反動的天皇制ファシズムとは異なり反反動体制を実現するまでに分裂統合の過程がある(例えば憲法改正と大統領制、これは行政権の強化を意味する。)

(ロ) 社会党の議会主義的、改良主義的体質は世界最左翼と云われても才二インターの特徴を持つ。いわば組織的な支えがないから政策の失敗と大衆的信頼の喪失で一氣に崩壊する性格のものである。

(ハ) 日共。ドイツと同様失業者政党の傾向を持つし、またスターリニズムの硬直性

は如何んともしがたい。統一戦線論をも  
具体的には表現できぬであらう。

というような点にあり、簡単に見ても混乱  
したものである。そしてこの他にも創価学  
会等の特殊な政治団体あり、どちらかと云  
えば反動ヘゲモニーの相対的な強さがある。

我々がこのような情勢において再度全国  
的な視野から何らかの新しい展望を打ち  
出すことは客観的必要であると同時に、我々  
自身の展開からも当然である。かつてドイ  
ツの危機がワイマール体制下におけるブル  
ジョアジーと軍隊と、そして大衆的反動団  
体ナチズムによつて実に計画的に遂行され  
たことを思うならば、我々は、表面的な池  
田内閣の迂回作戦総評の右傾化にのみ視野  
を限定することの危険性を自覚しなければ  
ならない。なるほど、AFLCIOを通じて、  
ラインヤワーを通じて総評の右傾化  
は促進されている。池田の高度成長政策、  
所得倍増は新たなよそおいで再登場するで  
あらう。だが、分派的反動政治を一貫とし  
て反動の方向におしすすめる政治要因、す  
なわち現在の岸、佐藤派グループは、いわ  
ば来るべきチャンピオンである。同周期的

に表面にあらわれる反動性、個々の反動政  
策への対決の頂点は、いまや計画的長期的  
な抵抗の姿勢にまで高められなければならない。  
我々は、大衆の大規模な政治過程への参加  
に對してきわめて有能なオルガナイザーと  
して自からをまず組織的にきたえておかな  
なくてはならない。

デモ好き、とか権力に對する憎しみとか  
の行動的な面のみその左翼的エネルギーを  
爆発させる時点から、理論的に意識的に  
組織的に長期の展望との関係で自からを規  
制できるよう努めなければならぬ。

我々の秋の政治斗争を迎えるにあつて  
の重要な任務は、

(1) 巨視的な展望への確信を深めること。

綱領討議を組織すること

(2) 厳然たる規約(特に財政に關して)を  
作りだすこと……である。

そしてこれこそが我々の脱皮にあつて  
の最も主要な困難でもある。

同志諸君の奮斗を期待する。

一九六二。九。九

## 全電通の右傾化と

### 左翼反対派の任務

大 崎 悟

労働運動全般にみられる右傾向を、総評  
幹部連中は自称日本型労働運動というが、  
その中にひそむ最大の問題点は、理論と実  
践の不統一を、日本型労働運動との名で指  
導部への責任を転嫁していることである。

殊更必要以上の政治斗争と経済斗争の分  
離化傾向は、太田議長の再三の談話で明ら  
かにされている。然し、幹部、指導部の動  
向とは別に、下部労働者は、六〇年の安保  
斗争の中で経験は崩り去つたのではない。  
従来の既成指導部の権威は単なるマヤカ  
シにしか過ぎないことは、完全に安保斗争  
に於て示されたのであり、そのことは、誰  
よりも労働者自身が一番良く知つているの  
である。

このような状況化にあつて新左翼労働者  
の果さねばならぬ任務は莫大である。  
それを、全電通内にあつて、民同との対決

に代々木の中傷の中に、労働者大衆の支持  
のもとに原則点からの運動の追求を続けて  
いる電通労研(電通労働運動研究会)の運  
動の中に見出すことができる。

全電通は、公労協の中でも最も斗争のし  
ない組合として有名であり、反面、戦術右  
翼理論左翼との別称もあるが、しかし合理  
化の攻撃を最も受けているくせに、中央本  
部役員は一人も首切られていないのでも有  
名である。しかも今年度の全国大会では、  
長期運動方針を決定した。論ずる迄もなく  
労働運動は資本主義下にあつて、単に労働  
者の労働条件、賃上げ等のみを闘うにして  
も、現在の如き国家独占資本主義下にあつ  
ては必然的に政治斗争するのは当然のこ  
とであり、そのことは安保の例をみてもわ  
かる如く、現今の情勢を固定的にとらえ、  
長期的に運動の設定を行うこと、その中に

ある情勢不変のとなえ方は、全く現実無視  
の非科学的であるのみならず、それは労働  
者階級への裏切り行為であることは否定し  
きれない。

情勢不変の設定のもとに提起される運動  
方向自身が、改良主義的であるのは、その  
意味に於ては筋の通つた、云いかえれば公  
社、政府も喜んでくれる方向であることは  
あたり前なのかも知れない。

電々公社の合理化は、才一次才二次を経  
て本年よりは電話の全国自動即時化を目指  
して才三次合理化に着手しつつある。才一  
次、才二次では電信合理化を主に進め、九  
月東京中電の改式を控え、残るは大阪中電  
が主要局として残る唯一の局であること、  
しかし、才三次は電信合理化の比ではなく  
電話の全国自即化によつて、約八萬五千の  
交換手が不用になると云われているのであ  
る。

何回となく主張されてきたことであるが  
合理化に對する基本的要求は何か、①時  
短 ②大巾賃上げ ③要員労働条件と、  
いつもいわれているのであるが、それが具  
体的に斗争目標としては位置づけはなされ  
なかつた。

確かに一単産で週五日労働制がそう簡単に  
とれるものではない、そこには少くとも官  
公労全体の統一した闘いが必要なんだとの  
共闘が設定され、しかも斗争のたびに、全  
体的斗争体制の未確立によつて闘うことは  
できなかった、とすべて共闘に責任転嫁を  
計る、これは現在民同幹部のとする下部組合  
員への説得とオドカシの典型方法である。

問題はこの民同路線がそのまま通用し  
ない状況がでてきていること、それは電通  
の場合、過去二回にわたる全組合員の斗争  
の一環投票の実施である。これは大巾賃  
上げを要求する時に、処分も割りきつて斗  
争を行なうかいなか、その意味では  
指導の無能力からくる下部組合員への責任  
転嫁 のために実施されてきたもので  
ある。然しそれは官僚組合、御用組合とし  
ての全電通の性格を変えずにはいられない  
内容を結果的には示したのである。即ち、  
才一回、大巾賃上げ七千円一律引上げ要求  
は七五%の賛成票を得、今年の春闘に於て  
の六千円要求には、八〇%を越す賛成票を  
とることができた。これは一人一人の組合  
員にとつて、いかに要求が切実なものとし  
て、また闘いのエネルギーがいつ爆発する

獲得の組織は存在しないかの内容にすりか  
えられてしまつているのである。全般的に  
いつて、情勢固定化の上に立つての方針は、  
すべての要求が漸次的に獲得してゆく方向  
に、つまり構造改革路線の革命目録めきの  
方向、修正主義に他ならないと断言できる。  
このような民同組合の中にあつて、左翼  
と称せられる部分の主張は、また承認でき  
ないものである。

電通全般的にみられる社会党系の進出の中  
にあつて、東京は逆に共産党系の進出が著  
しく、あとは大都市地区のみである。しか  
も、具体的討論過程に入つては、全く民同  
連の独だん場であり、それを阻止すること  
もできず、政党支持問題に關しても、社会  
党よりの路線の方向が一致していると、政  
策的に支持の論点が出されているのに参院  
選挙にあつて、私の信条と組合の決定で  
苦しんだ、この状態は、という調子で社共  
の支持を要請する全くの浪花節であり、展  
期方針での社会党支持が決定される末で  
ある。

だが、まだ明確に才三勢力としての登場  
は今回の大会ではできなかったが、電通新  
左翼の動向はより原則的である。大阪電信

かわからない状況を端的に示したのであつ  
た。

この斗争体制確立後に於て、斗争が行わ  
れず、ましてや要求とはほど遠い額(今年  
は一四五〇円)で要結されたあとには、大  
衆から一票投票の意義、及び民同ダラ幹  
の追求が起きてくること、事実、大阪市外電  
話局支部に於ける、そのため職場の署名を  
とつて、春闘に於ける斗争の不明点追求の  
行動が出たのであり、それは形態は異なつ  
ても他にも起きたのである。この時点では  
民同方式、即ち、他への責任転嫁論、国鉄  
が斗えなかつた、全通は才二組合問題で精  
一杯である等々のごまかしは職場に通用し  
なくなつたのである。

春闘の失敗の直后、総評太田議長の話  
は長期的にねばり強く斗つてゆく路線の設  
定を唱え、それは春闘の失敗を短期決戦  
の誤りと規定する事による責任回避の中で  
打出され資本の貿易自由化を目前にしての  
長期展望をもつことの必然性に、労働者階  
級も対応しての要求なり、斗争をという、  
労使協調主義に他ならないものであつた。

全電通が、公社の合理化長期計画に对应  
して、長期的に運動の設定を行うという方  
針も、必ずその最後の項目には、企業  
別組合より脱皮して産業別組織化えの方向  
が提起され、あたかも差別化以外に、要求  
に全国事務局を置く電通労研は、今や北海  
道、北陸を除く全国に組織化を完成し、現  
実の状況の中から組合官僚の追放と組合民  
主主義の確立をスローガンに、思想団体と  
しての領域にとどまるのではなく、労働者  
自らの手で理論と実践の統一の把握を自己  
の任務とし、原則点と具体的諸政策えの一  
貫した位置づけのもとに、大衆に訴え、行  
動を提起してゆく機能を發揮しつづける。

電通内左翼反対派としての位置づけそれ  
のみでは、それは限定づきでの組合主義化  
する危険は勿論ある。だがそれからの脱皮  
は、その限界を自覚しつづそれらに全活動を  
没入せねばならぬ現在日本の思想状況の、  
まさに反映にすぎない。

電通労研の全国化と、才三勢力としての  
登場は、現在当面する労働組合全体の右傾  
化の中にあつて、自らがそれに對應し得る  
方針の提起にすべてをかけるのみならず、  
いかに具体的実践が、一般労働者にもいか  
に影響を与えていくことができるか、換言  
すれば労働者の要求を政策に運引上げ、全  
般的方針に位置づけられる媒体として、  
更に宣伝、煽動の部隊としての任務が、必  
然的に課せられるであろうし、課せられつ

針も、実はそこに起因があるとみられよう。  
だがもつと重大な問題は、全国大会でのと  
らえ方のなかに、現在の情勢が変るとい  
うことは、アメリカが戦争を起すか、或いは  
ソ連が侵入してくるかのいずれかだが、少  
くともここ十年位はそういう状況は起きな  
いであろうとすれば、現在推則し得る段階  
での公社の経営方針に對しての長期的展望  
を持つ事は必要なのだ、との見解が、最後  
的に多数を制したことである。この見解は  
いかに日本労働者階級の主体的エネルギー  
を抹殺したかは、全く見事なほどだが、情  
勢不変の中での労働運動、つまり資本主義  
機構そのものの存置の中での労働者、そし  
て要求、つまりアメリカ型労働組合えの移  
行といつたならいがある事は余りにも明白  
になつて来ている。

たえば、週四時間労働制獲得のため  
に、今后毎年一時間づつの短縮を勝ちとつ  
てゆく、この方針があり、一方に於ては、  
ILO条約 問題とからんで週五日労働  
制を要求するとの項目もあり、矛盾だらけ  
の方針も、必ずその最後の項目には、企業  
別組合より脱皮して産業別組織化えの方向  
が提起され、あたかも差別化以外に、要求  
つある。  
その意味に於て、大阪市外電話で起きた春  
闘をめぐる指導部と下部大衆との斗争は労  
研のオルグによつてなされたものではなく  
大衆自身の現状打破のエネルギーを方向づ  
けた斗いとみるべきであらう。かかる状況  
は単に大阪市外の一特異現象なのではなく、  
一定の方向づけが、有効な組織化がなされ  
るならば、全般的に若起されうる現象なの  
である。

電通の自企業に對する位置づけを、利権  
よりも公共性、公共性よりも労働条件のス  
ローガンから、利潤よりも公共性イコール  
労働条件との設定に変更された所、皆が、  
単に空向上的修正としてのみとらえるので  
ないならば現在進行しつづある才三合理  
化えの対応がより明確にされねば意味はな  
い。そこにこそ労働条件、時間短縮、要員  
問題、国民の利益の向上との観点が、より  
階級的視点よりの追究がなされねば、空文  
句に終るのであり、究極の所、長期運動方  
針設定の情勢分析とは全く相反する実態が、  
全組合員の前にあきらかにされてくるので  
ある。

より一層具体的、かつ全体にひびく問題

として全国電話自動即時化計画は、炭労の政転争同様の泥沼斗争化する要因は、現在の状況下にあつては充分存在する。八萬五千名に及ぶ交換手の人員過剰化は、合理化に対する基本要請、時短、大巾賃上げ等の要求を、政府独占資本の意図を完全に打破する斗いを、組織化しえない限り勝利する道は存在しない。

## 総評大会とわれわれの任務

### II 62 総評運動方針批判II

木山茂

敗北を陰蔽する総括！  
ブルジョアを利用する方針！  
社共妥協の産物II総評運動方針を粉碎して、  
革命的労働運動を！！

「不利な答申がでる事が予想されるのに  
千人動員だけで何が出来るか」  
「何故すぐゼネスト体制を確立しないか」

「ヤマ元には、幹部不信、組織不信が  
ている。この事態を執行部はどうみるのか」  
これは、去る八月二十一、二の両日に開

それ故にこそ、全国大会での右傾化に対し、より現実的視点での追究が、民同の組合官僚私物化に反対し、代々木の無理論無方針を切捨てて、大衆の前に提起される方針、その作成能力の確立が要請されてくる。その状況の中に、電通左翼反対派のより具体的行動と任務が課せられているのである。

催された炭労臨時大会に於ける代議員の怒号である。石炭産業の危機は、ここ数年來深刻な様相を呈して来た。戦後資本主義の発展は、莫大な設備投資、技術革新による生産力の発展と労働過程の変化をきたした。日本独占の復活、膨張は、エネルギー源としての石炭、石油の莫大な需要を作り出した。にも拘らず、石炭産業の危機は逆に深まった。これは、石炭がエネルギー源として最早や使ひものにならなくなつた事でもなく、石油に比して劣るという物理的性状に帰因するものでもない。

寧ろ、国際市場に於ける競争力のゼイ弱さ故に、日本のエネルギー市場からも排除され、日本の独占企業は飽くなき利潤追求の為に進んで日本の石炭を排除した事が原因の一つである。中小私企業の広範な存在は、企業間の競争条件の劣悪性から脱却出来ずに、石炭産業に於ける生産力と生産関係の矛盾をその極致点に到らしめた。

さて、この石炭産業の構造的矛盾に加ふるに、今秋の九〇%自由化は、決定的に危機の爆發を促進する。同時に、現在、国際的規模で進行しつつある過剰生産要因の蓄積と日本資本主義の危機の深化は、石炭産

業をめぐる労働者階級と独占資本の対立激化を不可避的なものにし、現在、民同幹部の得意とする政転斗争の破綻を早めずにはおかないであろう。

さてここで、政転斗争を合理化し、自らの無能力と階級的裏切りの陰蔽を企てる社共の妥協的産物たる総評運動方針の分析に移ろう。

総評才十九回大会は、去る八月二十四日より行われ、「一年間の斗争の成果と欠陥」と題して総括を行った。

特に、炭労の政転斗争に言及して次の如く云っている。

「三池斗争でわれわれは多くのことを学んだ。なかならず労働者が団結して、力の限り闘う時にはじめて合理化の犠牲を最少限にいとめ、労働者の要求が大巾にかなえられ、政策転換のための譲歩を資本家からかちとることが出来る、ということを学んだ事は大きかつた。……」（最初に引用した炭労の代議員の発言と比較せよ）、又、三池斗争後の、貝島、宇部、杵島等の合理化反対斗争について

「……いづれも抵抗斗争を通じてそれなりに犠牲を最少限のものにしてきたが

しかしそれぞれ企業毎に分断された斗争であつたために、首切り、賃下げの攻撃を防ぐことは出来なかつた」と、企業別斗争の限界を指摘し産業別斗争の必要を説く限り正しい。而し、それ以上でもない。何故なら、現在炭労の直面せる危機の本質が、民同幹部やスターリニストの思考尺度をはるかに越えるものであるからだ。さて先を急ごう。次に政策転換斗争については、

……したがって炭労は、これらの斗争の総括を総括して、日本の国内産業である石炭産業を崩壊から守るといふ立場をとりつつ、ある程度の合理化をみとめ、一面において離職者の再就職を政府の責任において保障させるといふ離職者法案の成立を要求し、秋の政策転換斗争を組んだ。政策転換要求のもとに、炭労の全組合員は結集した。崩れかけた炭労の産業別統一斗争はたちな

おり、炭鉱労働者は希望をもつて前進しはじめた。「にも拘らず現実には、民同幹部が嵐の如く炭鉱を襲つている時、民同幹部は、調査団の答申が出る迄はという理由で、「ゼネストを！」「こんな事で勝利出来るか？」という労働者の声を抑え、希望を踏みにじつた。今春斗に於ける、炭労の

解雇制限の立法化要求を中心とした全山一斉の無期限ストで、政府と独占に対決し、調査団の結成をさせ、答申が出て安定職場が確保される迄首切りをさせない約束をかつたとは云え、現実には、特に中小炭鉱の相次ぐ閉山と人員整理は進行している。

長期かつ困難で、粘り強く闘う等という政転斗争が、中小炭鉱の労働者を見殺しにし、石炭産業の崩壊を守る立場に立つ総評民同幹部によつて、母や妻や子供を持つ数千、数萬の炭鉱労働者が体裁の良いルンペンになる為、その法律を政府に作らせる為、多大の犠牲を払いながらストライキに突入する事を指導する。これが反労働者的、反革命的と云わずして何であろう。

以上、引用して来た如く、政策転換斗争の総括として総評大会で指摘された諸点を要約するならば、次の如くなる。

(一) 三池斗争の総括から必然的に政策転換斗争が導き出される。労働者の団結と強力な斗争は、資本家に政転の譲歩を余蘊なくさせる。(三池斗争はそんな身勝手なお題目を教えなかつた筈である。資本家に譲歩させる事が出来る位なら、最もよく組織化され、最大限の実力行使体制を企業組合

としては驚動的に発展させ、産業別統一行動としては日本労働運動の中で最も先駆的であつたし、又資本の暴力に対しては、労働者の極力形態の崩壊と云い得る自衛武装等々を具備した三池労組を中心とした炭労が、既に多大の譲歩を獲得した筈である。行動方針、戦術、スローガンに「政策転換」を導入するかにないかに問題の本質はなかつた。

(一) 政策転換斗争は、炭労一〇年の伝統ある産業別統一斗争が次々に崩れ、全体が退却しつつあつたのを建て直した。その結果、離職者法を立法化させ、全山の敗北感を克服して、企業をこえる全山の無期限ストの体制をつくつて成果をあげた。云々。(確かに、三池斗争時とは異つて企業を越える実行使体制が確立された事は、事実である。而し、この事が政策転換斗争を合理化したり、その正しさを実証する事にはなり得ない。むしろ現実には、斗うエネルギーの爆発は、政府と資本家が石炭問題対策について首を横に振つたり、大要だと云つて調査団を作つたりする毎に斗いをストップしたり、体制待ちをする転換斗争をのりこえようとしている。これは、特に、

矛盾として把握するに留り、日本資本主義の景気循環局面、とりわけ帝國主義的危機の深化が進行する中で、日本資本主義の全般的危機との関連での把握が決定的に欠落している。

現在、九〇%自由化を控えて、日本資本主義の構造に変化が起きようとしている。これが、上昇局面に於ける自由化でない所に問題がある。

勿論、現在進行しつつある景気後退が、自由化を控えて企業、産業の競争力増強の爲に巨大な設備投資が行われ、その結果国際収支の赤字、外貨危機に端を発したと云え、これは飽く迄も、資本主義の基本的矛盾の蓄積、激化が日本資本主義の構造的諸条件を通して現実化したのであつて、高度成長政策の失敗とか市場構造の制約性とか、労働者の低賃金故の購買力の低さにその主要な原因を求める総評の分析とは全く異なる。ましてや、現在の経済的政治的危機の根因を日米独占の搾取、取巻に求め、安保体制強化として分析する、乱視的情勢分析で云い表せるものでも断じてない。

世界的過剰生産恐慌が近い内にあるという事は断言出来ないが、その要因の蓄積が

自由化を控え、更に、全般的な過剰生産恐慌の接近に伴う経済危機を契機として、炭鉱全山にわたる、資本の最も露骨な攻撃が労働者への首切りとして進行している客観情勢に対する労働者階級の敏感な反応である。政転斗争を指導する民間幹部と、それに協力する日共スターリニストの思考、特に労働運動に対する指導が、資本主義の安定末期の影響を受けて、体制内運動にしがみついているのに較べて、炭鉱労働者のそれはあまりにも対照的である。

従つて、炭鉱労働者の置かれてくる客観情勢に対する把握と、炭労の斗争目標、行動方針、特に現下に進展する階級情勢下に於ける日本の産業労働者の合理化反対斗争等との関連に於いて、全日本のプロレタリアートの革命的な斗争の展望は、総評大会に於いて発見し得ない。

政転斗争を、資本主義の危機が激化する時点に於いても、馬鹿の一つ覚えの如く固執し、粘り強い準備と長期の展望をもつてスト体制を準備してから斗うという民間。統一と団結を金科玉条として、幹部への批判を官僚的に抑制し、主観的な政治斗争と経済斗争の結合という原則を温め、安保体

アメリカ、日本、イギリス等で、進行しているといふ得る。これらの矛盾の尖鋭化は独占プロレタリアをして、より広大な市場への進出を至上命令にする。同時に、その為の、産業構造の変更、設備投資、企業合同、提携資本の集中、これに対応した搾取取巻機構の再編成、ブルジョアの統治形態の強化、帝國主義的反動化等々が、危機の深さと進行の度合に応じて、階級矛盾階級対立として表現されて来る。

そこで特に最近、石炭産業が構造的弱さを持つ故に、集中的に矛盾を激化させて来つつある。その解決は、ブルジョアジーが歴史上幾度か採用して来た労働者の首切り、労働力の破壊として現象している。従つて、階級対立は最も激烈な形態をとつてである。

而し、石炭産業にのみ集中して現象するという時期は遠のき、現在、海運産業、鉄鋼産業、繊維産業等に於いても、矛盾の激化が進行しつつあり、その矛盾の現象形態や質的な面に於ける差異はあつても、全般的に共通する傾向である。首切り、閉鎖から賃金ストップ、操業短縮、雇用停止等々様々である。

制打破、民族独立なる戦略、その為の統一戦争の結成、プロレタリアートの革命的な実行行動を軸としない空想的権力形態、を意図する日共スターリニスト。これら既成指導部に対して、左翼的批判と行動を対置する新たな左翼潮流や革命的労働者を、帝國主義の手先、トロツキスト(これはこんな風に使われるべきでない、最も革命的でプロレタリアートの真の前衛を指し示す時にこそ使われるべき名称なのだ!!)、分裂主義者等々のレッテルを貼りたがる共共が、労働運動を指導する限り、客観的には、今後益々労働者の犠牲を無駄にし、最も憎むべき、そして打倒すべきブルジョアジーと帝國主義者共に、逃げ道を与えるであらう。

日本のプロレタリアートと、マルクス・レーニン主義で武装する革命的な新左翼はこれを許してはならない。

以上特に、総評大会に於ける、炭労の政転斗争の総括に視点を据えながら論を進めて来たが、その結果、政策転換斗争が構造的改良なる戦略路線を理論的基盤としたものであり、特に、石炭産業の危機に關しては、それを単に、日本の資本主義の構造的

これらは、産業の構造的不況とか、自由化を控えての体質改善とか云われる如き、現象形態をとつてはいるが、これらの矛盾の根源、本質は、資本主義固有の矛盾の激化である。ここで、これらの全般的な矛盾の激化を指摘する時、果して、海外市場への進出と自由化後の猛烈な国際競争に日本資本主義の矛盾激化の一時的解決策を、必死に追求する日本独占ブルジョアジーと政府に、政転斗争に対して譲歩を与える程の余裕が物質的基盤として存在するかどうか?、この解答は極めて明らかである。政治体制の危機を、発する程の斗争がない限り無いと答えざるを得ない。

従つて、次の事が云えるのではないだろうか。過去一年間の斗いの総括に當つて、総評大会は、炭労の政転斗争についても、賃金斗争についても、又企業別斗争から産別統一斗争への実現、権利斗争及び政策法粉碎、核実験反対等々の政治諸斗争の総括に於いて、「.....われわれの斗争は独占資本と池田内閣の野望の完遂をくいよめてゐる。われわれの斗争は前進し、かれらはその思うことを思うままにできていない。.....」と述べているように、総括

の基準が明確でない上に、量的、物理的に  
闘いが総括され、前進したと云われている  
に過ぎない。

プロレタリアートの闘いとは資本との闘  
いであり、その時々的情勢を正しく分析し  
最も有効的に斗争を展開して行くのである  
以上、客観情勢のより科学的な把握とそれ  
に照応するプロレタリアートの闘いの展開  
階級関係、特にその対立関係の物質的推移  
と主体的展開との関連で検証されるべきで  
ある。

所が、運動の総括を展附された事は、欠  
陥についての現象的羅列、と主体的条件の  
前進後退に運動の発展をみる方法は、あた  
かも、ブルジョアジーが、総評の体制確立  
迄、攻撃の手を休めてくれるような錯覚を  
与える。

既に述べた如く、自らの欠陥と指導性の  
無さを除き、下部労働者の切実な多様な  
批判意見を官僚的に抑えつけた反労働者の  
性格で貫かれていく。「そんな事を我々が  
どうしてやるだろうか、根柢のない中傷だ  
！」と反論するであろう。民間幹部や日共  
スターリニストが意識的にやっているとは  
敢えて云わない。而し、客観的に果す役割

は、極めて反労働者である。政治的、経  
済的危機が迫れば迫る程、その影響は大き  
くなる。

さて結論を急ぐ。  
特に政闘斗争を中心とする運動方針が、  
未だ資本主義の安定的発展局面の名残り、  
その反映としてのブルジョアの体制内運動  
であるのに反して、現実の階級情勢は、危  
機の成熟として進行している。

見られる如く、日本労働運動内部では、  
今后、政闘斗争の限界は暴露され、又は破  
産と同時に、戦場活動家、特に革命的労働  
者による指導部への批判が突き上げられる  
だろう。

われわれは、彼等と共に闘いの中核と革  
命への準備を始めねばならない。徹底的な  
反幹部斗争と強力な運動を通じて為さねば  
ならない。総評大会は、われわれ革命的労働  
者には、その必要を要請している。

本稿では、特に今年度の各産業労働者の  
闘いの諸方針を中心として、検討出来なかつ  
た事は残念である。われわれは、単なる  
左翼反対派としてでなく、脱党を始め、鉄  
金黨、公労協、公務員等の闘いの展望と、  
革命、又とりわけ、無関心と、右翼的傾向

## アルジェリア問題について

浦野正彦

「OSRがなくなっても、BERGがこる  
。」——去る7月3日、独立宣言をしたアル  
ルジェリアのFLN指導者がふとこのよう  
にもらしたと伝えられるが、独立アルジェ  
リアの苦悩は、解放軍の内部抗争にあると  
いうよりはむしろ、世界経済の全般的再編  
成の段階における非工業化国プロレタリア  
ートの苦悩である。平和共存の論理自体が  
斗争を指導したのではなくて、それが斗争  
とは無関係であるか、そのように名付ける  
ことによつて、それが斗争の「へと転化  
する過程である」と、みなければならぬで  
あらう。

アルジェリア人民は、過去の八年におよ  
ぶ時間をフランスからの独立のために闘  
つた。七年という年月は、その間にたとへば  
国際的な通貨の交換性回復などといった、

戦後の世界情勢の方向を決定した主要な諸  
事件をふまえて流れた年月であつたし、そ  
れが独立斗争そのものの性格を複雑にし、  
単なる独立、単なる自立という意味には表  
現され得ないところの内容を解放軍そのも  
のに与えたのである。それは、大戦直後の  
、いわゆる嵐のような民族自立運動が民族  
ブルジョアジーに指導され、彼等自身の政  
権の確立として終つたのと異なる時期を画す  
ものである。外的には、ファンズムに対す  
るデモクラシーの勝利として表現されたが  
二次大戦が、デモクラシーの勝利ではなく  
て、帝國主義そのものの勝利、再編強化で  
あることが、後進國植民地人民の肉と血に  
しみて明らかにされてくる過程がそこにあ  
り、内的には、民族ブルジョアジーの政策  
そのものが、自立をかちとつた国において  
も人民そのものに対する圧政として結果す  
るという過程がそこにあつた。

左翼的傾向等の諸思想が混然と存在する労働  
組合を、如何なる闘い、によつてダイナ  
ミックな斗争に組み込むか、如何にして全  
労働者の不満要求を組織するかという問題  
等について、積極的に提起する。現在、我  
が同盟の各産業に点在する労働者の組織的  
準備はスピーディーに進められつつある。  
次号に予定している事を附記しておく。

才二次大戦中、ガンジーに代表されるも  
つとも原則的な反帝・独立運動が、国民党  
議派の勝利におけると、それは国際共産主  
義運動にとつては、その指導者にレーニン  
勲章をおくることで片づけられる問題であ  
つたのかもしれないが、依然として帝國主  
義支配の下にある植民地人民にとつては、  
単なる名譽、一つの勲章では解決つかない  
問題がこつたのである。彼等はだから、  
自己の運動方針として描かねばならない未  
来像に、深刻な疑問と、抑圧されたエネル  
ギーを賭けなければならなかつたのである  
。民族運動の指導者の書架にレーニン全集  
の訳本がいつごろか並びはじめたか、私は  
知らない。しかし、どの意味においても、  
キニーバ革命がおこるまでには指導者たち  
はその方向を志向したのであろうし、だから  
その革命が現実のものとして歩みはじめた  
とき、人々はそれをメツカとしなければなら  
なかつたのである。

アルジェリア解放軍を指導したものの、そ  
れは、GPRRの首脳者や民族的英雄では  
なくて、カストロやフランツ・ファンン（  
一切の対仏協力の拒否、永久革命と徹底的  
な破壊活動を唱えた）であつたことは、そ

の意味で象徴的である。彼等はそれまでのアジア・アフリカにおける解放運動、アラブ「社会主義」の枠を否定しなければならぬことを、OASと統火のなかで意識の裏面に刻みつけていたのちがいない。

## 2.

フランスにとつてのアルジェリアは、たゞ「フランスのもの」であつたにすぎなかつた。勿論、数万の入植者とフランス資本にとつては、むしろ重大な利害関係を意味した。それ以上のものを意味していたにちがいない。それ以上のもの、とはいふまでもなく、斗争の激化——自己の支配の危機である。

だが、彼等にとつて幸運であつたのは、武力抗争が本国に及ぶことがなく、ドゴールが何とかうまく処理したことではなくて、それは空気のなかに敵が同類かを識別しようとする獣の嗅覚を備えた敵対者が存在しなかつたことによるのである。

たしかに政治的危機は幾度も訪れてはいた。だがもつともすぐれたフランス左翼の指導者すらも、アルジェリア独立戦争の本質をFLNに対する仏軍の拷問、あとにな

つておこるOASのテロ、それらの「非人間行為」にしかみず、それは「フランス帝国の最大の汚辱である」といつたのである。彼にとつては、問題はフランスがいかにおうように、大國の貨録をもつてアルジェリアを自由にするかということではなかつた。まして、平和と競争が新しい時代の原罪だと信じる「党」の指導者にとつては、要するに「党指令」による一、二度の抗議デモとストでとにかく何とかしろと、ドゴールにせまることが方針はあり得なかつた。

もし彼等が、才三次大戦後の民族資本の勝利が人民にとつてはどの貧しい食物の味にも備しない名譽しか意味せず、それが単なる民族自決の原理と風潮として歴史に記録されるあのすばらしさしか意味しないということを知っていたら、アルジェリアの独立が何を意味するか、エビアン協定はどう生まれるであろうかを予見しえたはずである。しかも、フランス資本がアルジェリアで失うべきものを、それが幾倍にもふくれあがつて自分たちのうえにのしかかつてくる、その重畳を感知しないはずはなかつたのである。ドゴールは、國民投票のたび

が、それは単なる平和のための団結、独立ペンザイを三唱することしか知らないスタリニスト諸君と全く同様の日和見主義である。何ゆえにエビアン協定が成立したか、ドゴールアルジェリア政策がどれほどの支持をうけたのか、諸君も知らないはずはないのだが。

## 3.

ベンベラにとつてアルジェリア問題の解決であるのは、もつと直接的な問題であり、わが反スタ主義者が唱えるような未来の彼方の問題ではないことを、彼のさきの言葉が語っている。

アルジェリアの都市民、中産階級に依拠するベンヘツダが対仏協力、OASとの協定にも応じようとしたのに対し、農村とそれを支配する解放軍に依拠したベンベラにとつてアルジェリア問題は帝国主義者との斗争として位置づけられねばならない必然性をもつていた。アフリカにおいて、最も豊かな国といわれるアルジェリアのフランスからの解放は、その下層農民の要求の挫折を意味するとならば、アルジェリア人はさらに自己の要求をかかげて運動を展

開しなければならぬ。停戦が、その運動の武装解除を意味することであるならば、アルジェリア人はさらに自己の要求をかかげて運動を展開しなければならぬ。停戦があるならば、抵抗の継続とみずからあらたな方向を志向することしか問題の解決はありえないのである。

独立後、表面化した対立——内戦に対して、アルジェリアを中心に戦争反対デモが展開されたが、その組織化自体、単なる平和要求か否かを検討することは重要である。すなわち、ベンベラにとつて、全体の力とは、農民の武装と権力の掌握を意味しなければならなかつたし、事実運動はその方向をたどりつつある。軍の再編成と制憲議会選挙が、どの主導力によつて導かれるかということは、いまの最も重要な問題である。

「あらゆる傾向をふくむ、団体と和解と平和のための人民委員会——統一戦線」はここで何の意味ももたない形式用語であることが明らかであろう。しかも、それが意味をもつとするならば、それはフランスの軍事基地を認め、対仏協力の忠誠を代償にした五億ドルの援助資本をフランスと

に、テレビ演説の一語一句に次の意味を刻みつけたはずである。「あちらからとつてもくもものはフランスにとつてはどうしても必要なものなのだ。今度はおまえたちからそれをもらうはかはないのだぞ。」と

それに対してもつとも原則的であつたのは、フランスの右翼であり、ブルジョアジ—であつたらう。アルジェリア問題に対するドゴール信任の圧倒数がそれを証明する。支配の危機はとにかくひとつの段階を通過し、そればかりか危機の支配を實現し、フランスブルジョアジ—は極右の伴奏を派手に、ドゴールを西独へ向寄せたのである。臨時政府に政治局を設けて対仏協力を否定的にとらえようとするベンベラは「前衛が問題なのではなくて、全体の力が問題だ。ヨーロッパ工業國の労働者はまだ革命を實行することもできないし、アルジェリアの植民地戦争が八年間続くの食い止めることもできなかった。」と語つたといわれる。わが愛すべき日本の反スタ主義者は、「アルジェリア問題の解決はフランスプロレタリア革命との結合以外にありえない」と、まるでマルクスばりの口をきいてアルジェリア問題の行方をきめたつもりでいる

アルジェリア民族資本のために増殖することしかない。アルジェリアの下層農民は、その意味のまえにというよりはまず、資本と大土地所有のまえにたち上らねばならぬ。

最も新しい報導によれば、アルジェのALN正規軍による無血占拠が成功したと伝えられる。アルジェリア問題の解決は、来るべき制憲議員選挙へむけて、FLNの中央集権化と、それを支えるアルジェリア人民の政治的成熟度の如何にかかっているといわねばならない。独立とともに表面化するであろう多くの大衆運動が、その中央集権指導部に指導される意識性をむしろとりあげねばならないし、それはまた、ベンベラを中核とする政治局が問題にするところの「全体」の力がどのように拡大されるかの問題でもある。

## 4.

独立のあとで、GFRと政治局の対立がこのように表面化しようとしていたとき、モスクワでは、平和世界大会が開かれていた。世界平和評議会において、この大会のテーマを「軍縮と平和にするか」、「軍縮

と民族独立」にするか、採決によつて前者がとられたといわれる事情があつたと伝えられるが、語られた「平和の思想」は、要するに新しい時代の原理——共存と平和であるといふことだつた。その原理が、平和の哲学であるならば、どの意味でも利害は発生しないであらうが、全人類史の時期を画する哲学であるとして語られるとき、それは重大な非難をうけることを意味しなかつたらうか。

たしかに核兵器の出現は、才二次大戦後の世界情勢に大きな要素を附加した。しかし、まず何よりも、戦争と平和の問題をとりあげて語らうとするものは、いわゆる「平和」こそがもつともよく戦争を準備するものであることを確認しなければならぬのであつて、平和を愛するよう、人々に説得することが自己の任務であるのではない。どの意味においても存在しない平和一般を語ることは、結局人々にたゞあるがまゝにあらしめよと命令することしか意味しない。平和を守れと人々に要求することが問題なのではなくて、平和を守るためにはこれこれのことが必要なのではないかと語ることが問題なのである。

## 平和運動への接近

竹野 敏

平和運動と反帝国主義斗争の接点をどこに求めるのか。この問題をめぐつて、二十世紀十年から今日に至るまで、平和運動はジグザグの過程を経ながらも尨大な大衆のエネルギーを結集させて来た。才八回原水禁世界大会は、この問題に何ら解答を出しえず、共產党と社会党との暴力紛争の中に流会していった。

マルキストの生命は、現実に起る事実に解答しうるかどうかにある以上、我々は、尨大なエネルギーを国際的規模に於て見せている平和運動に新たな方針を与えねばならない。

我々が平和運動の方針を追求する場合、その視点は、国際的な規模での情勢における激励の開始——国際経済での景気循環の同時性と自由化、国際政治での軍事編成と反帝国主義斗争、それに対して平和運動はいかにかゝり合うかという問題である。

だから、平和の問題は何よりもまず階級的な問題として結果する。武装の喪失が平和を生むのではなくて、階級の問題の解決だけが平和の結果として、もたらすのであり、その平和は依然として次の階級的な問題を準備し、戦争を準備する。その戦争に備えることを知らず、平和を守れと人民に要求することは、一切の苛酷と専制を少数の他人のために耐えよと要求することであり、無条件の白紙委任を敵の手にゆだねることである。(ついでにいふならば、反戦斗争という名の運動は、戦争反対という一点において自己の階級的課題をわすれるのであり、同じ階級の課題とは結合しえない。それは突りのない分裂か、無意味な存在——反動へと転化する)そして、たとえ「軍縮によつて容易になつた独立」は、従来の支配者階級の支配そのものを容易にする。

アルジェリア——NATO強化とフランスの核クラブ加入、西独再武装……核保有のなかで斗われたこの独立斗争は、ブルジョアとその右にならぶ諸君の考えとはどの意味でも合致せず、独立を、まさしく諸平和運動は反帝国主義斗争とは異つた運動法則を持つている。人類史的危機へのゾチブルの反応として運動は進展する。しかし、平和運動は、国際情勢の激動の進行と同時に反帝国主義斗争に分解されていったし、来るべき激動の時機に再び反帝斗争に分解するであらう。我々は、その尨大なエネルギーを正しい方針のもとに集約せねばならない。

才二次世界戦争以降、核保有国の出現によつて平和運動は爆発的な展開を見せたが、反帝国主義斗争とは異つた次元で運動を發展させていた運動は帝国主義段階への資本主義の發展を契機に発生した。我々は平和運動の歴史を再検討する事によつて、その問題点を把握しなければならぬ。

A才一次世界帝国主義戦争と平和運動V世界戦争以前に於ける平和運動はいわば

君の考える独立とは異つていた独立を、かちとらうとしている。すなわち民族と国家の独立ではなくて、ひとつの階級の独立、被支配者階級による支配者階級の支配を現実の課題としているのである。それは八年という時間と、アルジェリアという地域の歴史的過程ではなくて、キューバに代表される全世界的規模での後進農業諸国の歴史的過程であるとみななければならぬ側面をもつのである。そして、その独立の論理は、いわゆる「戦争と平和」論の論理とは別個の、いわば革命の論理として展開される。アルジェリア人民の勝利は、ますます激化する戦争——階級斗争のなかにおいての、FLNの中央集権、人民の政治的成熟度にかかると。「戦争と平和」の論理はたゞ、その斗争を停滞させ、おしとどめる役割しか果さない。(四)

理想主義的運動であつた。百万長者(カーネギー・ノーベル)からアナキストまで存在したが、帝国主義戦争(一九一四)を前にして、「祖国防衛」「戦争をなくす為の戦争」等の排外主義的運動に転化していった。

その中で反戦の旗を最後まですてなかつたのは「徴兵拒否連盟」「オランダ反戦会議」「民主統制同盟」等の団体であつたが、それらとても平和運動を純粹ヒューマンズム運動として展開出来ずプロレタリア運動と結合(プロレタリア反帝斗争に解体)していった。

平和運動は革命的高揚期に反帝斗争として高められるという歴史的運命を証明した。「ぜがひでも平和を」という坊主式センチメンタルのばかけたあこがれをほうむれ。国内戦の旗印をかかげよう。「……戦争を一刻も早くやめさせることに努力すると共に、戦争が引き起した、経済的政治的危機を民衆の自覚をよびますます為に利用し、それによつて資本主義的支配の廢絶を促進する為に全力をつくして努力する義務がある。」(一九〇七シニョットカルト大会)レーニン、「平和の一切の綱領

は、もしそれがまずオ一に、大衆に対する革命の必然性の説明に、いたるところではじまっている大衆の革命的斗争の発展の支持及び協力を立脚しなければ民衆の欺瞞であり、偽善である。」(一九一六、レーニン)と、平和運動を反帝斗争に高める不

### B八一九三〇年代の平和運動V

オ三期の戦術(社会ファシズム論)から人民戦線戦術へとジグザグをたどったこの時期は、「現在の条件のもとでは、平和維持の斗争は、反ファシズム斗争であり、この斗争は本質からいって革命的である。」「これは今、國際プロレタリアート全体の中心任務である。」等々の如く、尨大なプロレタリアートのエネルギーを革命斗争に指導しえずに、ブルジョアの戦術に一切をおし込めてしまった。

「平和擁護斗争と革命斗争とを一応区別して前者の発展が後者に役立ち、その成長を助けそれを促進する。そういう形で両者主義者としての自己の立場と運動の指導者としての立場を区別し、大衆運動としての平和運動を追求した。しかし一方、反帝主義斗争との関連は後退し、「平和運動の強化が反帝主義陣營の強化を示す」という意味が決して平和運動がイデオロギ一的にも反帝主義イデオロギーで武装していなければならぬことを意味するのではない。」原予兵器の機な脅威を禁絶する為には世界的な規模で運動を行う事が必要であり、それも幅広い基礎の上に現在の國際的緊張の原因についての考え方にかかわりなく通常人をすべて結束出来る様な運動が必要である。……「原予兵器に短期間に、ストツクホルムのアビールに数億の署名を獲得する事が必要である。」と、平和運動と反帝斗争との関連は、平和運動を反帝斗争に高める視点で問題を追求するといふよりは、いかに組織するかに一切の問題が解消されてしまった。

一九五四年以降の平和運動に於ける二つの潮流は、①オ二次大戦後のコミンフォルムの流れをくむAAグループ運動—民族解放斗争と戦争反対斗争の結合——と②ス

はつながられており、又そういう意味で前者の全面的な、独自の発表こそが國際プロレタリアートの中心任務であると考えている。」とすでに現在の平和運動の誤りの基本的な転換がなされ、帝國主義的平和の為の斗争に一切はかえられてしまった。ヒットラーとの野合、とそれの敗北による帝國主義諸國との野合による民主主義か、ファシズムかのオ二次大戦。民主主義一般の為の斗争に契約され、革命斗争への止揚は放棄された。

### Cオ二次大戦後の平和運動V

オ八回原水禁世界大会に象徴される平和運動の混乱は、中ソ論争の直接導入として行われている。

それは、一九四七年のジダノフ、スミロフのコミンフォルムによる民族独立路線中共と一九五〇年ストツクホルム世界平和擁護者大会のジョリオリキエリ一の幅広路線ロシア、(全面軍縮へ)との歴史的対立としてあった。

ジダノフコミンフォルム路線は、「オ二次世界戦争の終了は、一切の自由愛好諸國民の前に、ファシズムに対する勝利を強化する恒久的な民主主義的平和を確保す

トツクホルムアビールの流れをくむ原水禁運動——軍縮——である。

一九五七年、イギリスのクリスマス島の水爆実験を契機として、平和運動は爆発的高揚を見せた。アメリカ資本主義とイギリス資本主義の相対的地位の低落と國際情勢の矛盾の激化、を反映してのイギリス核実験とそれに対する尨大な大衆の立ち上りが起った。

それを契機として、一九五八年ストツクホルム集會に於て、中国代表が言った「戦争の根源は帝國主義である。」「敵を明確にせよ」といわば、國際情勢の激動を反映して、「反帝斗争にエネルギーを集約せよ」とそれ自体としては、正しいスローガンをかかげながら、一切を米帝反対へという誤った路線は、情勢に關係なく、直接的に平和運動に分裂をもたらすものであったし、オ八回原水禁大会は、その誤りを暴力事件によって集中的に表現した。

### △現在の平和運動と

我々の追求すべき方向V  
「米フレンズ奉仕委員会」(一〇万)「平和の為に立上られ」運動(婦人)「非暴力行動委員会」「健全核政策委員会」等々、

るといふ最も重要な問題を提起した。……

その指下の役割は、ソ同盟とその対外政策とがはたすべきものである。このことはソヴェト社会主義國家の本質から出て来るものである。」とソヴェト大國主義を赤裸々にしながら、資本主義諸國のプロレタリアートの任務は、民族独立であるとする。スターリンの平和運動の方針が、反帝斗争と平和運動の独自性を認め、反帝斗争にその比重を与えるという、いわばそれ自身では正しい立場を見せながら、一切を共産主義者による指下共産党による指下に還元したその誤りをジダノフスミロフ路線は、拡大再生産した。その機なコミンフォルム路線は、一九五〇年のソヴェトの原爆保有の発表、トルーマンによる原爆再使用宣言を契機として起った尨大なヒューマニズム運動によってその方針を變更させられ、ストツクホルム世界平和ヨゴ大会にエネルギーは集約された。①原予兵器禁止、②國際管理、③すべての核実験反対、三スローガンとする新たな運動形態は、一切を共産主義者による指導、共産党による指下でなければならぬとするコミンフォルム方

民衆の除々の支持を獲得しているアメリカ平和運動。

英労働党左派の線を守る「百人委員会」「核軍縮委(OND)」の英國平和運動。「平和の為の運動」(共産党系の平和運動)「原予兵器反対フランス連盟」(一般軍縮と社考進歩の為の会)の仏平和運動。「核非武装イタリヤ委員会」「イタリヤ平和連合」のイタリヤ平和運動。

「原水協」「核禁集會」「オ二原水協」の日本の平和運動。等々 國際的平和運動は、新たな國際情勢の変化に規定されて、部分的には暴力的機相を見せながら、尨大な大衆のエネルギーを集約している。現在の平和運動の新たな方向は、いわば、一九一四年の平和運動、一九五〇年代の平和運動、一九四五年、一九五八年の平和運動が、歴史的な情勢に規定されて反帝斗争と結合していった限り、(オ三の巨人)EBCの出現により情勢の中心がEBCとの関連でなされ新たな反帝斗争の高揚に対していかに関連するかという基本点の解題のもとになされねばならない。國際經濟に於ける景気循環の成熟と、國際的な危機の同時性を前にして、平和運動は、國際的に反帝

和運動の再建を勝ちとる為全力をつくすであらう。

國主義斗争に高めうる条件をもっている。それは、中共、日共路線のごとく、すべてを反米斗争という情勢の客観性の欠陥からくる分裂の方針でなく、又、すべてを完全軍縮へという、反帝斗争との関連の欠陥と具体的方針の欠陥ではなく、情勢の成熟とそれに規定されて現象する各民族国家内での政治反動（戦争の民族国家内要因）への対処でなければならない。

「ロシア革命は、パンと平和と自由」という、それ自身革命的でもないヒューマンイズムのスローガンを情勢と関連させた戦術によつて反帝、革命斗争へ高めたように、米ソ核実験反対というそれ自身、革命的でもないスローガンを、「一方的非核武装宣言」という戦術（ナイキ、キネーリ）もちなみに反対）を謀介にして、それと憲法改悪（国防）との関連のもとに、反帝國主義斗争に高める視点を追求しなければならぬ。それは、指導の問題に一切還元出来るものではなく大衆をいかに高めるかとして問題がたてられねばならない。指導部の無能と誤った方針に混迷している、老大な大衆を、我々は全学連再建の過程で、各地方原水協の我々の視点による再建によつて平

## 社会主義学生同盟を再建し

### 反帝斗争としての学生運動を展開せよ

学 対 部

#### 学生運動の現状

我々が、いま、ブントと共に崩壊した社会学同を全国化し再建しようとする事情はいかなるものであろうか。

安保斗争後の状況は、池田の高度成長政策のもとにプロレタリアートも包括され、安保斗争で登場した革命的潮流は、工場において大衆から切断され孤立化しているかみえる。総評の日本の組合主義に始まり、安保三池をへた後の社会党の構造改革の導入は、まさしく安保改定を結節点として外的澎張と、それに見合つた構造変革日本資本主義の高度成長に対応し、資本家の構造政策を修正することに自己の党派性を示さんとしたものであつた。そして構造改革化をふくめた多くのインテリゲンチヤ安保斗

争の大衆を絶対化することによつて、まず、その市民主義は強化されている。

一方、日共は8回大会で民族民主路線を確定し、民青を通じて、「歌とおどり」で大衆化を目ざしつつ、同時に基地斗争を強化し、極左冒険主義への萌芽を示しつつある。

それでは、学生戦線における現状は、いかなるものか？

安保斗争後、ブントにかわつたマル学同は対象と切断され所にマルクス主義追体験の把握による主体性と、かかる方法論によつて必然化されるソ連論によつて反帝、反スタ路線をとらえたのであつた。それは、何よりも現実の科学的把握と大衆との密着

によつて運動の中に党派性をきすくのではなく、観念的に天上に主体を確立し安らぎを得ることだつたのであり、それ故にこそ安保斗争の経験によつて、科学的把握の無能力に達着し大衆から切断された一定の部分を確保することも出来たのである。

しかし、安保世代の主流は、この部分ではなく、対象把握を志向しつつはたせず沈黙していつた多数であることに注目しなければならぬ。彼等は、結局、プロ連派の分解と多数のマル同への移行によつて消滅する。だから、対象把握を志向し、（同じことだが）大衆運動を目ざす部分は、安保斗争に中心になつて参加した人々から断絶した所に、むしろ安保斗争を一大衆として戦かつた人々によつて荷なわれなければならなかつたのである。従がつて、ブントが持つた、理論的内容と我々の経験を批判蓄積することができなかつた。しかも、安保以降の状況は、先に述べたように基本的には、高度成長政策の展開過程として大衆斗争は不活発であることが、ますます、マル同的非運動主義に拍車をかけることとなつた。

しかし、安保以後2年間続いた日本資本

主義の高度成長も矛盾をきたし、階級斗争の激化を生みだしつつある。

マル同は、大衆運動にせまられる時、必然的にセクト主義と大衆追随主義に分解せざるを得ない。なぜなら、彼等は、反帝、反スタという抽象的な内容を、しかも、現実の諸矛盾の科学的把握を通して、具体的に暴露し戦いの居坐を示すのではなく、ただ本質規定を一方的に宣伝し、自己の組織へ結束することに専念するという方法しかもたないからである。その具体的な表現は、彼等の反スタという党派性(無内容な)を買ら抜くための好個の材料としてのソヴイエト核実験反対を情勢とは無関係にやることでしかない。

しかし、一方、大衆運動を指向する部分も情勢に対応しているとは云えない。彼等の現実への対応は、あれこれの問題と、あれこれの戦術をさすものであり、その斗争の科学的把握によつて大衆の膨張の成長を助けるものではないのである。それ故に著しい大衆運動主義に傾斜し、ただある一つの斗争の時だけ集まつてくるという非組織法も生まれるのである。

そして、民青は、「歌とおどり」でソフ

トなムードで大衆を集め自己の党派の拡大を目ざし、構改が、まつたくの混乱状態にあるものとすれば、大衆的な運動が起らないのが当然とも云えるのである。結論的にいうなら、社会学同の再建によつて、反帝斗争としての学生大衆運動を復活させようといふことは目ざすのである。

### 社会学同の歴史

社会学同は、一九五八年、反戦学同の発展としてつくられる。

ひろん、それは、学生運動のいわゆる「転線路線」と無関係ではない。六全協後、いちばやく、八中委九大大会で全国政治斗争としての学生運動を復活させた日共全学連グループは、その後の運動の過程一平和擁護斗争で、平和共存路線を否定し、国際主義を復活させ、同時に、永続革命にもとづいて二段階戦略を否定し、日共中央の民々路線に対し日本帝国主義の打倒を主張するにいたる。しかし、我々はその間に、学生運動の諸経験と、一方で労働運動の後退一因鉄新湯斗争、王子製紙鉄鋼の備銀斗争、勤評c.c.c.iという現実による要請によつて、この転換が行なわれ

たことに注目する必要がある。

社会学同は、日共中央から独自性をもつて、ブント結成の橋渡しをし、ブントの結成とともにほとんどの同盟員は、ブントへ移行し実体を喪失するのである。

そのようにして実体を喪失した社会学同が安保斗争の敗北とブントの崩壊に伴なつて再び登場してくるのは、ブントの崩壊によつて、もはや新しい前衛といった形で問題をたてるのが不可能となりながらも現実には、学生大衆運動が要請されたからである。

それは、又同時に、ブントが、全学連グループを構造的に「新たな党」をめざすことによつて大衆運動主義的な傾向をおびし、一方では、他党派との対抗から、宇野経済学c.c.c.iを接木することによつて一つの理論体系を現実と無関係な時に構築しようとしたことへの反省であつた。

従がつて、新たな社会学同は、自律的な学生運動としての性格をおびる。それは、一応、学生運動と独立した所に学生運動を展開しようとするものであつた。だが、そのことは、決して、労働運動と切断されることを意味するものではない。現実には、

学生運動のあり方は、何よりも労働運動に決定的に影響されるからである。従がつて「自律的」であるには逆に、労働運動への理解をもち、常に全体的な政治情勢の中に学生運動を位置づけることを意味する。ただ労働者階級の解放は、彼等自身の事業である」といわれるように社会学同によつて労働運動を云々するのでなく、それは、彼等自身の(従がつてその前衛の)事業にゆだねようというのである。

しかし、自律ということをやチブル的に俗的に、学生運動をいわば勝手にやればいいのかのように理解して「アナルコ、サンジカリズム」へ走つたのが、例のセクト派となるものであつた。

### 現時点での社会学同再建の意味

安保以降、高度成長政策による福祉国家への幻想を保証した日本資本主義の高度成長も例の通り国際収支の面から破綻を示し、しかも、一貫した設備投資による過剰生産的傾向は、景気後退からの回復力をきわめて弱いものとしている。そして十月の九〇%の自由化をかえり、日本資本主義は、いわゆる「転型期」をむかえ、輸出の増大

競争こそが、成長を保証するものとなりつつある。そして、労働者人民に対しては、物価の値上り、中小企業を中心とした部分的な首切りと操短による賃金の引下げといった形でしわよせされている。これに照応し、新らしく成立した池田改造内閣は、経済状況と見合った形で、反動攻勢をしかけ、憲法改定を準備しつつある。

だが、一方労働運動では、社会党の構造

改革路線による社会主義への著しい傾斜と、総評大会で確定された、合理化への妥協労働プランに表現された三池斗争以来の炭労の敗北、そして独占企業を中心とした安定賃金の導入と新しい労務管理方式による労働者階級のブルジョアイデオロギーのもとへの包括と後退を続けている。

だが、そのようなブルジョアイデオロギ

ーと停滞した基本である経済的危機の進行は、必然的に労働者階級の反抗をまねくであろう。そして、社会党総評の路線は文字通り日和見主義として現出することは必然である。

学生運動も又、それに応じて昂揚期をむかえつつあるといつてよいであろう。しかし、我々は、以然として、新らしい

前衛というた形で問題を提起するわけにはゆかない。安保斗争で登場した新左翼労働者の多くは革共へ行くことなく、組合内左翼反対派として存在し、あるいは、個人的理論活動に専念し、政治的な一致点に達しているわけではない。恐らく、より一層の客観的情勢の進行と理論内容、運動の経験の交渉といった形で連絡の再開から始められねばならないであろう。

しかし、現実には、階級斗争は一個の党派とは独自に進行するのであり、あるいは又一個の党派も、現実の運動とのかかわりあいを抜きにしては形成困難といわねばならない。そして、先に述べたような階級斗争の激化の見透し(それは憲法斗争に集約されるであろう)に対応しないわけにはゆかない。

社会学同の再建は、従来の学生運動(安保とブントを含くめて)の経験をかまえて、新しい情勢へ対応しようというものである。日共はひろん、マル同によつても見失なわれた反帝斗争としての学生運動を復活せねばならない。それは、前にも述べたように自律した学生生活者組織としてであ

電通大阪労研の斗い

全電通関西の拠点、大阪中電の執行委員選挙は、社共の攻撃の中で新左翼、中電労研は定員十二名中四名の立候補者を立てて斗った。特に執行委員定員八名に対し、社会党五名、労研四名、共産党二名、無党派二名、創価学会一名の、計十四名が立候補し、選挙斗争は、各派の職場オルグが徹底されて、異常なほど組合員の関心を呼び、更に公社当局の差し金の一部になされる中で、投票は中電支部結成以来の投票率、八四%強を記録し、労研は、二位と七位で二名が当選し、新左翼の低滞気味を打破る成果をあげた。

また、春斗の終始をめぐって指導部と対立した大阪市外支部で、労研の執行委員を執行部の統一を乱したとの理由で、組合員としての権利停止六ヶ月がさる六月十五日の支部決議機関で、職場討議を経ることなく、圧倒的な民意、社青同のアクラツな

動きのため可決されたが、電通近畿地本は、本人よりの異議申請を受けて、審査委員会を設置して調査した結果、むしろ問題は、市外支部の組織運営ならびに指導に問題があるとして、次期決議機関で処分を取消せとの結論を出した。ために八月三十日より開かれた近畿地方大会で、地本より以上の結論に従つての報告があり、不服を唱えた市外支部代議員に、地本委員長より、マージャンで徹夜する事が出来るのに、職場の混乱に対処するのに徹夜でやれない法があるかと、一カツされ、また、九月五日の市外支部委員会では、執行部より地本決定通り処分取消しの方針を論議した場合、先の六月十五日に出席した同じ顔触れの支部委員が出席しているにもかかわらず、何の反論もなく可決された状況に、良心的無党派支部委員より、憤慨して、一体前の決定に賛成した時、職場の見解をどのように把握

していたのだと、鋭く追究がなされても、一言の反論が出ない状況であつた。一方職場では、処分されたり、回復されたり、全くながなにやらさつぱりわからんとの意見も出され、又活動家層には、従来、トロツキストハネ上り、と称せられた労研のメンバーの活動に、新たにその意義を認めるものも統出し、社青同、民青の中でも、真険に考える部分は、全く自信を失つたと言明せざるを得ない姿を提起した。益々労研の活動は、一部活動家のみでなく、全組合員にその活動の是非が論議される状況を呈する現象を目下見せている。

編集後記

△ 月毎に発刊の計画が遅れ、同盟員諸氏と一般読者諸氏に大変めいわくをかけたしまつた。ここに第十二号をお送りする。

△ 学生同盟員が夏休みのため、同盟全体諸活動がやゝ停滞せざるを得なかつた時期を終え、下半期の政治斗争はいまやはじまろうとしている。

△ 念願(?)の右傾化に大きく一歩踏み出した総評の大会に対して、我々は如何なる視点から厳しい批判を為すべきか。木山同志の論文はその一主張である。熟読していただきたい。

△ 我が同盟の組織的強化の問題。書記局による「主張」にも明らかに、しかも断固として説かれていた如く、我が同盟の組織を強化することは、当面展開されるべき大衆斗争の指導能力を確保することからして、更には新左翼組織の長期にわたる基盤を作ることにおいて、決定的に重要なことである。

各社学同支部、各細胞における組織的点検、討議と整備を直ちに開始することを要請する。そして、この作業を通じて来たる同盟員総会への建設的提言を……。

△ 最近、本誌の売れ行きが、少しづつではあるが確実に増大している。そのため曾根崎書房(大阪)、ウニタ書房(東京)での限られた部数では一般読者に需要に何かと不満を与えている。編集部では、この十二号から定期講読の予約を募集、受けつけをはじめめる。前金で発行者(労働者協会)あてに申しこんで下さい。尚、三ヶ月以上連続予約をされる場合には送料は当方で負担します。

一九六二・九・一一(八州富)